

総合4年「やさしさを広げよう」

袋井市立袋井北小 西澤明日香

1 はじめに

本単元「やさしさを広げよう」では、「下級生や様々な立場の人とふれあう活動や福祉体験を通して、それぞれの人の思いに気付く。自分もまわりのみんなも笑顔になるために自分なりにできることを考え、行動に移すことができる」の2つを目標としている。そして単元で発揮される自律と協同の資質・能力を「関心を高め、課題を見つけること」「実践したい、発信したいという思いをもつこと」「学習を振り返り、次の活動へ生かそうとすること」と押さえた。

2 実践

(1) 体験活動からの対象との出会い

ここでいう対象とは「福祉」となるが、いきなり福祉の学習に入るのではなく、まずは1年生とのかかわりの場面を設定した。このとき、ほぼ平行して社会福祉協議会の方を招いて、ユニバーサルデザインについて話を聞く場の設定も行った。福祉とは何か、袋井市としては福祉についてどう考え、どんな取り組みをしているのか、どんなものがユニバーサルデザインであるのかを知る機会とした。

この二つを平行して行ったことで、「どんな人（だれにも）」に対してもできるやさしさを考えていこうと、自然な形でめあてとして下ろすことができ、単元のスタートを切ることができた。

(2) 体験活動の充実

児童の思いは体験活動を充実させることによってあふれ出るものだと考える。本単元を展開するにあたって多くの体験活動を取り入れた。1年生との交流から始まり、校外活動となる高齢者施設への訪問等も計画して、行ってきた。児童にとって初めて体験するものも多く、点字や手話体験後は普段の学校生活の中で実践しようと試みる児童も多数見受けられた。

また、幼稚園や高齢者施設への訪問活動は2回ずつ設定をした。1回目の訪問前に、疑問やその予想を立てる時間をとり、1回目の訪問に向かう。1回目は、相手の施設に任せる部分も多くなるが、見学をしたり予想との比較をしたりし、たくさんのことを吸収する時間となる。そして帰校後、振り返りをもとに、2回目の訪問ではどんなことを行うのか計画を立てた。繰り返しの場を設定することで、初めは受動的だった計画や活動も主体的に考え実行することができるようになった。

(3) 振り返りでの交流（対話と協同）

体験活動のみで終わらず、振り返りでの交流が大切であると考え。体験活動やゲストティーチャーの講話のあとには、必ず8シンキングで自分の思いを書き出す活動を行った。「3つの『は』」をキーワードにして児童に投げかけ、ワークシートに書き出した。8個のますの中に自分の考えを書くことで頭の中の考えを引き出したり、絞りこんだり、分類したりすることができると考え、1年を通してこの方法で自分の考えを書き出している。

自分の思いを書き出した後にはグループや全体で思いを共有する時間をとり、考えを深めたり広げたりできるようにした。対話を通して、思いを共有したことで、気付きの少なかった児童も体験活動を繰り返すうちに自分の思いを引き出せるようになったり、一人では無理でも仲間と課題を共有し、対話しながら解決に向かう姿も見られたりした。

3 成果と課題

まず成果として、対象との出会いを工夫したことはねらいにせまる上で大変有効であった。単発の体験活動に思えるものも、「だれもが」をキーワードに「自己の生き方」という本単元での「自分もまわりのもみんなも笑顔になるために自分なりにできることを考え、行動に移す」ことへつながっていった。2つ目に、つながりのある学習展開ができたと感じる。体験活動と振り返りを繰り返したことによって、児童自身が課題を設定、そして解決し、また新たな課題を見つけていくという学習ができた。その過程で重要であるのは仲間との対話と協同であることも強く感じられた。3つ目に8シンキングを使って学びの足跡を目に見える形にしたことで、思考の変化が教師側からも児童本人からも仲間からも分かりやすかったことが挙げられる。児童自身が曖昧だった考えを整理して書き表すことで、交流がしやすくなり学びの実感を得ることもできた。

課題としては、児童自身が課題をもつことや、学年単位で活動することの難しさ、そして児童一人ひとりの思いに沿って活動を計画できないこと、外部の方と教師側との思いのずれ等、多々課題があることを実感した。今後はこの課題を少しでも解決できるように研修を重ねていきたい。